

フランソワ・ラブレーの作品における 名詞の性について

平手友彦

1 はじめに

現代フランス語確立の途上にあり、流動的で、統一性を欠いた16世紀フランス語の世界の中で、フランソワ・ラブレーがすさまじい造語力を駆使し、一連の巨人物語『ガルガンチュア・パンタグリユエル物語』¹⁾を生み出した事はよく知られている。その16世紀フランス語の流動性と不統一性を、言葉にとりわけ強い関心を持っていたこのユマニスト²⁾の全作品に考察するため、筆者は現在「ラブレーの文法辞典」を作

1) 後述するような理由から、本論文では以下の T. L. F. 版を使用し、引用もこれらによる。

François Rabelais, *Pantagruel*, Genève, Droz, 1965.

François Rabelais, *Gargantua*, Genève, Droz, 1970.

François Rabelais, *Le Tiers Livre*, Genève, Droz, 1964.

François Rabelais, *Le Quart Livre*, Genève, Droz, 1947.

François Rabelais, *Pantagrueline prognostication pour l'an 1533*, Genève, Droz, 1974.

尚、『第五之書』及び小品については以下のテキストを使用した。

Rabelais, *Œuvres complètes*, Garnier, 1962, 2 vols.

Rabelais, *Œuvres complètes*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1955.

2) 「凍った言葉」(『第四之書』55-56章)等のエピソードがあるが、「言葉を集める」ということで言えば、『第四之書』の終わりに付けられた Briefve Déclaration D'Aucunes dictions plus Obscures [...] が問題になるかもしれない。この「難句略解」は注釈者の視点が現れていて、注目されるべきものであるが、スクリーチによれば、どうやらこれ

はラブレーの手によるものではなくさそうである。(M. S. Screech et Stephen Rawles, *A New Rabelais Bibliography, Etudes rabelaisiennes* t. 20, Genève, Droz, 1987, p. 236. これに対し、ユションはこの「難句略解」にラブレーの文法システムの特徴と言語学的概念が表れているとして、ラブレーの手によるものとしている。Mireille Huchon, *Rabelais grammairien, Etudes rabelaisiennes* t. 16, Genève, Droz, 1981, pp. 406-411) 尚、この「難句略解」に挙げられた名詞には性が明記されていない事を付記しておこう。

むしろ、ラブレーの全作品中で一度だけ使用される«dictionnaire»という語の方が興味深い。この語は1539年のロベール・エチエンヌによる仏羅辞典初版タイトル(R. Estienne, *Dictionnaire Francoislatin*)に初めてフランス語として使用されたことが確認されているが(Georges Matoré, *Histoire des dictionnaires français*, Larousse, 1968, pp. 59-60. なお、マトレによれば英語では1526年に初めて確認)、その5年後にラブレーはこの語を『第三之書』47章の中で使っている。この47章は、パニユルジュがランテルノワ語の「辞書」を旅の道すがら作るというもののだが、彼はここでこの「辞書」は「新しい靴一足ほどにはもつまい」と述べている。«je t'en feray un beau petit dictionnaire, lequel ne durera

成中である¹⁾。本論では、この辞書作成の項目から名詞の性を取り上げ、ラブレーの全作品中で、現代フランス語と異なる文法的性(以下「性」)の扱いを受けた名詞を調べ、それらの名詞の性がどのように定着、変化し、そして、その原因がどのようなものであるかを考察する。

16世紀フランス語では現在とは異なる性の扱いを受けていた名詞が少なくない。ラブレーの作品についてもその幾つかは既に指摘されている²⁾。しかし、全作品を通してのヴァリエント及び頻度を含んだ網羅的調査は行われていない。そこで、ディクソンとドーソンによるラブレーのコンコーダンス³⁾を使用してラブレーの全作品に現れた全ての名詞について調査した。しかし、このコンコーダンスはラブレーの256576語から成る全作品を網羅しているが、使用されたエディションはヴァリエントが表示されておらず必ずしも最良のものとは言えない⁴⁾。16世紀の作家研究では、その作品の「変化」を含めて考察することを忘れてはならないが、とりわけラブレーのような作家には、この「変化」にこそ重要な意味が隠されていることが少なくない。そこで、今回の調査では、このヴァリエントと頻度にも注目し、このコンコーダンスで発

guerres plus qu'une paire de souliers neufz;» (*Le Tiers Livre*, p. 316) ここに、16世紀前半から始まるフランス語語彙の急速な増加への暗示を読み取ることも可能かも知れない。

1) 「ラブレーの文法辞典」作成の出発点はラブレーの作品を読む際に文法と語彙の問題点を解説したものとよい、というものであった。語彙の方面ではバルディングー(Kurt Baldinger, *Études autour de Rabelais, Études rabelaisiennes* t. 23, Genève, Droz, 1990)らが精力的に研究を進めているようであるが、文法に関しては Georges Gougenheim, *Grammaire de la langue française du seizième siècle*, Lyon, I. A. C., 1951; nouvelle édition, Picard, 1974)のみで、まだ十分ではない。そこで、筆者はラブレーの全作品中に16世紀前半のフランス語文法の実際と変化を探るという作成意図のもとに、このユマニストの言葉の世界を辞書の形態で提示する試みを行っている。また、この辞書作成の試みでは以下の点にも注目していきたい。

1 ラブレーによる語の使用変化を調査することで「寄せ木細工」としての『ガルガンチュア・パンタグリユエル物語』の形成過程を探る。

2 ユションが既に試みた(M. Huchon, *op.*

cit.)『第五之書』及び小品へのラブレーの関与についての手がかりを提示する。

2) Edmond Huguet, *Étude sur la syntaxe de Rabelais comparée à celle des autres prosateurs de 1450 à 1550*, Hachette, 1894; Genève, Slatkine reprints, 1967, pp. 21-39; Ferdinand Brunot, *Histoire de la langue française des origines à nos jours*, t. 2, Le XVI^e siècle, A. Colin, 1967, pp. 400-407; G. Gougenheim, *op. cit.*, pp. 40-45.

3) J. E. G. Dixon et John L. Dawson, *Concordance des Œuvres de François Rabelais, Études rabelaisiennes* t. 26, Genève, Droz, 1992.

4) このコンコーダンスはPléiade版(注1参照)を使用している。コンコーダンス作成は、その使用テキストに制限される事は言うまでもない。ラブレーの全作品についてのエディションが確立されていない現状では、エディションの選択は大いに悩むところである。従って、手に入れ易いPléiade版を使うことも無理はないが、これは原典校訂版ではなく、少なくとも今回の調査では適さない。尚、ユションがPléiade新版を今年(1994年)秋に出す予定である。そうなるとこのコンコーダンスはますます使い難いものになるのではないだろうか。

見たすべての用例を T.L.F. 版を中心にして詳細に検討し直した。

2 調査・分析一覧

現代フランス語では、名詞の性の特定は、形容詞及び分詞の一致、冠詞、代名詞によって可能となるのだが、16世紀フランス語では、形容詞及び過去分詞の不一致などの制約があって必ずしも容易ではない。例えば、grand, vert, tel, loyal, saint¹⁾と母音の前の ce (cest), bon などの形容詞、過去分詞(とりわけ属詞となる過去分詞)は、性に一致しない場合が多いので²⁾、今回の調査では、原則としてこれらの要素によって男性名詞と特定出来る用例は対象外にした³⁾。

この調査の結果をまとめると以下の様になり、ラブレーの全作品で現在と異なる性の扱いを受けていた名詞は総計 54 語判明したことになる。

	男性	女性	両性	総計
有生名詞	1	1	3	5
無生名詞	18	8	23	49
総計	19	9	26	54

各々の名詞の調査及び分析結果を一覧表にしたものが表1である。

左端1列目には、現代と異なる性で用いられた名詞を有生・無生名詞に大きく分け、ラブレーが扱った性ごとにアルファベ順に通し番号を振った。語の表記はテキストでの出現状態で、出現状態が異なる場合には特別な場合を除き一例のみ表記した。2列目は頻度数を示す。両性で扱われている場合は男性、女性の順で並べ、頻度数は特定できないものを除いた数値である。従って、「1」は他に性を特定できない用例があることを示す。また、「+」、「-」及びその後の数字はヴァリエントの増減を示す。3列目は語源形とその性を示し、特に記していないものはラテン語による。語源

1) F. Brunot, *op. cit.*, p. 282 seq.; Charles Marty-Laveaux, *La Langue de la Pléiade*, Appendice à la *Pléiade française*, Lemerre, 1896-98, 2 vols; Slatkine Reprints, 1966, p. 11 seq.

2) 逆に名詞の性に確実一致していると思われる形容詞には、今回の調査では少なくとも competent, délicieux, diligent, divers, divin, gros, long, nuisant, plaisant, précieux, urgens があった。

3) 実際には今回の調査対象にするかどうか躊躇した名詞があった。例えば、「à la rustique」という表現が『第五之書』『模倣戦記』

に1例ずつあるが、これは rustique の後に mode が省略されていると見なした。また gens と minuict は現代フランス語でも性の区別は微妙である為に敢えて加えなかった。更に、brin と office はラブレー研究協会版 (*Œuvres de François Rabelais*, édition critique publiée par Abel Lefranc et autres, 6 vols., Champion et Droz, 1913-1955) のヴァリエントでは各々現代フランス語と異なる性の扱いを受けているが、T. L. F. 版ではこれらのヴァリエントが存在しない為、ここには加えていない。

表 1

Rabelais		fréquence	étymon	J. P.	R. E.	J. N.	R. C.	R.	cat.
nom animé									
A. m.									
1.	scolopendre	1	scolopendra, f	—	—	?	f	F	S
B. f.									
1.	guide	hapax	ita. guida, f	mf	f	f	f	M	U, E
C. m./f.									
1.	aigle	2-1/1+1	aquila, f	m	m	(m)	f	MF	S/E
2.	trompette (homme)	1/2	trompe, f	—	—	m	m	M	S/E
3.	unicorne	1/2	unicorne, m	—	?	(f)	f	M	S
nom inanimé									
A. m.									
1.	affaire	8	(<facere)	mf	m	(m)	m	F	M
2.	ambages	3	ambage, f	—	?	?	?	F	U
3.	antistrophe	hapax	antistrophe, f	—	—	—	f	F	?
4.	balane	hapax	balanu, f	—	—	—	f	F	S
5.	ebene	1	ebenu, f	—	m	?	m	F	S, O
6.	enigme	2	aenigma, n	—	?	?	m	F	E
7.	epigrammes	hapax	epitaphu, n	—	?	?	m	F	E
8.	epitaphes	1	epodu, m	—	f	(f)	m	F	E
9.	epode	hapax	scriptoriu, n	—	—	—	f	F	S, E
10.	escriptoire	1+1	hyacinthu, m	f	—	f	m	F	E
11.	hiacinthe	hapax	obolu, m	—	—	m	m	F	S, E
12.	obole	3	odore, m	f	mf	m	f	F	E
13.	odeur	1	(<offere)	f	mf	m	m	F	E
14.	offre	3	periodu, f	—	—	—	f	F	E
15.	periode	1+1	*asperella, n	—	?	?	f	F	E
16.	presle	0+1	*sagia, sagu, n	—	—	m	m	F	E
17.	saye	2	topazu, n	—	f	f	f	F	E
18.	topaze	2		—	—	—	—	F	E
B. f.									
1.	comté	2	comite, mf	f	m	f	m	M	U
2.	duché	2	*ducata, mf	f	?	f	m	M	U

3. espace	1	spatiu, n	f	f	mf	f	MF	U
4. lobe	1	grec. lobos, m	—	—	?	—	M	U
5. mensonge	1	*mentionica, f	m	—	?	—	M	E
6. rhombe	hapax	rhombu, m	—	—	—	—	M	U, S
7. source	0+1	superciliu, m	f	m	?	—	M	U
8. thermes	1	therma, f	f	—	?	—	M	E
C. m./f.								
1. aage	5/3-1+1	*aetaticu, f	f	f	m(f)	mf	M	U, Y/E
2. amour	3+1/3-1	amore, m	f	mf	m(l)	mf	MF	U, E/Y
3. arbre	7?+2/11?+1	arbore, f	f	mf	m(f)	m	M	U, S/E
4. ars	7/3	arte, f	f	m	m	m	M	S/E
5. cabal, cabale	1/3+1	háb.qabbalah, f	—	—	?	—	F	S/E
6. caresme	4+1/2	*quaresima, f	m	f	f	f	M	E/E
7. comete	2+1/2-1	cometa, m	f	f	f	f	F	E/U
8. enclume	0+1/2	*incudine, f	f	f	f	f	F	E/U
9. estude	3-1/6+2	studiu, n	f	f	f	f	F	E/U
10. humeur	2/2	humore, m	f	mf	(mf)	f	MF	S?/E
11. mode	0+1/16+2-1	modu, m	f	f	(f)	mf	M	E, S/U, E
12. navire	1/18	navigu, n	mf	f	(mf)	mf	M	E/U
13. negoce	4/1	negotiu, n	m	?	?	m	MF	E, Y/E
14. œuvre	1+1/4-1	opera, f; opus, n	—	—	?	?	M	U, E, P
15. oraige	1/1+1	aura (+aticu), f	m	—	?	?	M	U/P
16. oultrage	2?/2?	(ultra+aticu)	m	m	(m)	m	MF	U/P, P
17. ouvrage	3/1	opera, f	m	m	(m)	m	M	/T, E
18. palude, palus	1/0+1	palude, f	—	m	m	m	M	/U
19. reste	48+9-1/4+2	(<restare)	f	mf	(mf)	f	M	/U
20. silence	1/4	silentiu, n	m	f	?	m	M	/E, S
21. sors	19/7	sorte, f	m	m	(m)	m	M	E, Y/U
22. teneur (=contenu)	2/1	tenore, m	f	—	(f)	f	F	U/E
23. tige	6?-1/1?	tibia, f	—	—	?	f	F	

J. P.: J. Palsgrave, *Lesclarissement de la langue francoyse*, 1530

R. E.: R. Estienne, *Dictionnaire Francoislatin*, 1549

J. N.: J. Nicot, *Thresor de la langue francoyse*, 1606

R. C.: R. Cotgrave, *A dictionarie of the French and English*, 1611

R.: *Le Petit Robert I*, 1984

についてはワルトブルグ・ブロックとワルトブルグ F.E.W. を参考にした¹⁾。4-8列は16-17世紀前期の辞書と現代フランス語の辞書での性を示す。辞書名と出版年は表の下に掲げた。ポールスグレイブ(J.P.)は辞書ではないが、性を記した名詞の英・仏語一覧があるので挙げ、また、ニコ(J.N.)の《()》は見出し語ではなく用例中の性の扱いを示す。そして右端の柱は、現在までの様々な研究を参考にして、性の変化を起こした要因分析の結果を省略形で示したものである。Eは語源、Mは合成語、Oは出典テキスト、Pは接頭辞、Sは意味、Tは外国語、Uは接尾辞、Yは文体効果を表す。

さて、名詞の性はどの様に変化したのか。ラテン語から現代フランス語に至るまでに性が変化した名詞がある²⁾。ラテン語にあった中性名詞の多くは俗ラテン語の段階で男性名詞となるが、中性複数形からは女性名詞単数形との混同により女性名詞となったものがあり、また、mer<mare, jument<jumentumなどは中性単数形から直接女性名詞になった事が知られている³⁾。また、ラテン語の名詞の性が現代フランス語にそのまま継承されていないものもある。現代フランス語の名詞の性についてはグレビスの *Le Bon Usage*、歴史的にはハッツフェールドとダルメステーター、ニロップ、ドーザがそれぞれ詳しく分析し⁴⁾、とりわけニロップは性の変化を恣意的に解釈することを批判して、「歴史的に」解釈することを強く求めている⁵⁾。

これらの研究によれば、名詞の性の変化は、その名詞の語末・語頭形態、意味、統語等の原因によるものであり、ラブレの名詞の性のゆれの多くも、表1の分析結果に見られるように、これらの内の一要因、または複数の要因の引合いの中で現れたものと言えるだろう。以下、この表1の名詞を幾つか取り上げて具体的に説明を試みよう。

1) W. Von Wartburg et O. Bloch, *Dictionnaire étymologique de la langue française*, P.U.F., 1991; W. Von Wartburg, *Französisches etymologisches Wörterbuch*, Tubingen, J.C.B. Mohr, puis Basel, Bering und Lichtenhahn, 1922-

2) ラテン語から現代フランス語への性の変化、特に古フランス語に於ける性のゆれについては、今田良信「ラテン語から現代フランス語に至る名詞の文法性の変化についての研究——古フランス語に於いて性のゆれのある名詞を対象として——」、『広島大学文学部紀要』, No 46, 1987, pp. 362-385. が辞書を材料に詳細な調査・分析をされている。

3) A. Hatzfeld et A. Darmesteter,

Dictionnaire général de la langue française du commencement du XVII^e siècle jusqu'à nos jours, Delagrave, 1924, p. 186; 藤田知子「言語と性差——フランス語名詞の「性」(genre)について——」、『異文化コミュニケーション研究所紀要』, 第3号, 1991, p. 19.

4) M. Grevisse, *Le Bon Usage*, Duculot, 1986; A. Hatzfeld et A. Darmesteter, *op. cit.*; K.R. Nyrop, *Grammaire historique de la langue française*, t. 3, Copenhagen, Gyldendalske Boghandel Nordisk Forlag, 1936; A. Dauzat, *Le génie de la langue française*, Payot, 1947.

5) K.R. Nyrop, *op. cit.*, p. 354 seq.

3 現代フランス語と異なる性の名詞

ambages (無生名詞 A-2, 語尾要因)

ラブレーは『第三之書』で2例、『第四之書』で1例、いずれも「longs ambages」の表現で使用している。この名詞はラテン語源も現代フランス語でも女性扱いで、語頭もこの傾向を強める。ラブレーはこれを、-age (<-aticum) を接尾辞に持つ名詞が男性名詞となること²⁾から類推して男性名詞としたのではないかと考えることができる。尚、-age で終わる語には、aage, oraige, outrage, ouvrage のように男性名詞傾向が見られる。他にも -e, -é, -ace など語尾の類推からラブレーが性を決定したと思われる名詞がある。

odeur (無生名詞 A-13, 語源要因)

「臭い」、「香り」両方の意で男性名詞扱いが3例ある。接尾辞 -eur を持つ抽象名詞は現代フランス語では couleur, ferveur, pudeur 等のように女性名詞となるはずである³⁾。しかし、ラブレーは語源に戻って男性名詞扱いにした。ニロップによればこの傾向は16世紀によく見られた傾向であるとのことである³⁾。今回の調査では、表1にあるようにラブレーの性の決定には、この例のように語源の性に戻って決定されることが多いように思われる。

以上2例のように、語尾形態及び語源要因によって性が決められた名詞があるが、それだけではなく、様々な条件が他にも働いた。そのような例を次に見て行きたい。

scolopendre (有生名詞 A-1, 意味要因)

現在では女性名詞扱いのこの名詞は、ワルトブルグ・ブロック、ケッセルリングによれば1552年版の『第四之書』にラブレーが初めて使用したとされている⁴⁾。ラテン語源は女性、語尾も女性を類推させ、コットグレイブも表1にある通り(R.C.)女性扱いをしているが、ラブレーでは男性名詞扱いである。なぜ男性名詞扱いなのか、その理由はテキストに隠されている。この名詞は、ラブレーのテキストでは、直後にこの語を同格で「serpent」と説明しており、この男性名詞 serpent の類推で、男性名詞扱いされたと推測できる。

1) 例えば K.R. Nyrop, *op. cit.*, p. 370. また、1530年の段階で既に、ポールスグレイブはいくつかの例外は認めながらも -age, -aige で終わるすべての名詞は男性名詞であるとしている。L'Éclaircissement de la langue française par Jean Palsgrave, suivi de la grammaire de Giles du Guez, par F. Génin, Imprimerie Nationale, 1852, pp. 168-169.

2) K.R. Nyrop, *op. cit.*, p. 374.

3) *Ibid.*, p. 362; p. 374.

4) W.V. Wartburg et O. Bloch, *op. cit.*, p. 579; W. Kesselring, *Dictionnaire chronologique de vocabulaire française, le XVI^e siècle*, Heidelberg, Carl Winter Universitätsverlag, 1981, p. 328 尚、ケッセルリングは、この名詞を女性名詞として表記している。

ressembloit au scolopendre, serpent ayant cent pieds comme le descript le saige ancien Nicander. [*Le Quart Livre*, p. 158]

このような文中の前後の名詞による意味の類推で使用性を決めたとと思われるものに、無生名詞 A-4 の balane「亀頭」(元来「フジツボ」の意)が有り、現代フランス語では女性名詞であるこの語をラプレーは男性名詞扱いにした。

ebene (無生名詞 A-5, 意味・出典要因)

ラプレーは 1552 年版の『第四之書』に一度男性名詞として使用している。ラテン語源は女性、語尾も女性名詞を類推させる。樹木が男性名詞になる傾向が強いことからラプレーが男性名詞扱いとしたと考えられるが (R. エチエヌ (R.E.), コットグレイブ (R.C.) も男性名詞扱いにしている), ラプレーによる用例を検討すると, これはウエルギリウスの『農耕詩』(2-116) から引いたもので¹⁾, ここでウエルギリウスは «ebenum» と使っており, ラプレーはこれをそのまま男性名詞にして使用したのではないか。尚, ガフィオは『農耕詩』のこの使用箇所での «ebenum» を中性名詞としている²⁾。

以上, 現代フランス語の性と反対に使用されている名詞を見てきた。次に男性・女性の両性で用いられている名詞について検討を加えたい。

4 両性で用いられている名詞

ラプレーは一つの名詞を異なった性で使用している。同じ作品中, また, 同じ章の中でも異なった性になっていることもある。

表 2 は, 表 1 に挙げた名詞のなかで両性で用いられている名詞がラプレーの作品のどの部分で現れたかを一覧にしたものである。

縦軸左端にはその名詞を挙げ, 横軸には各作品名を挙げてある。作品の下には, (完成)初版出版年のみを示し, 表中の数字は章数, 女性扱いは «f», 男性は «m», 不確定は «?» を, そして文体を区別する為に, 手紙, 会話, 詩句中での用例にはそれぞれ «1», «d», «v» を付した。頻度数が多く, 分析にはさほど必要とされない用例については, 各作品毎に «=» で総計だけ挙げた。ヴァリエントは «→» で表し, «()» の数字はヴァリエントがあった版の出版年で, 『第五之書』の «(M)» はラプレーの死後 16 世紀末に作られたパリ国立図書館蔵の筆写本 (Ms. fr. 2156) であることを示す³⁾。

1) *Le Quart Livre*, op. cit., p. 222, note 13.

2) F. Gaffiot, *Dictionnaire latin français*, Hachette, 1934, p. 568.

3) 『第五之書』の最初の 16 章までは, ヴァリエント表記がなければ, 未完成版 *L'Isle Sonante* (1562 年) と 1564 年版完成版では同じ性で扱われていたことを示す。

1951年にグゲナムがコルネイユの《foudre》について、性の扱いのヴァリエーションを比喩的な意味(女性名詞で「神の武器」)と本来的な天候の意味(男性名詞で「雷」)で分析した事があるが、十分な解明にいたっていない¹⁾。その他にはこのような名詞の性の使い分けに関する分析は見あたらない。勿論、ラブレーが名詞の性を使い分けたという事を自ら語っているわけではないし、上述した様に当時は現代フランス語への過渡期で、名詞の性にも相当の混乱があり、ラブレーのみならず、他の作家における名詞の性の扱いについても同じことは言える。しかし、一見すれば無秩序に使用されたように見える名詞の性も、語源及び語の形態だけではなく、その使用時期、テキスト内部の意味、文体による影響なども詳細に分析することによって、その変化の原因を推定することが出来るかもしれない。以下にその分析を試みる。

amour (無生名詞 C-2, 語源・語尾・文体要因)

現在でも複数形や詩文では女性名詞としても使うこの名詞は、ニロップ、グレビス、ドーザによれば古フランス語では女性名詞扱いが多く、中世末期より語尾 *-our* と語源からの影響で男性名詞扱いが増え²⁾、そして16世紀では両方で用いられた³⁾。尚、ポールスグラープは *-or (our)* で終わる名詞はすべて男性名詞であるが、例外的に *amor (amour)* は女性名詞であるとしている⁴⁾。表2にある通り、ラブレーも『パンタグリユエル物語』9章、ジョフロワ・デスチサック宛の1535年の手紙に見られる通り、初期では女性扱いにしていた。

je [=Pantagruel] vous [=Panurge] ay jà prins en amour si grande [1542年版では *grand*], [*Pantagruel*, p. 54 (dialogue de Pantagruel)]

attendu la bonne amour que luy portez principalement, [*Œuvres complètes*, Garnier, t. 2, p. 539]

そして、後期の作品『第三之書』から男性名詞扱いに変えている。このように男性名詞にしたのは、当時にとっては新しい(?) 語源による男性名詞優勢の傾向の影響からではないか。

(respondit Panurge) ce vers denote qu'elle m'aymera d'amour parfaict. [*Le Tiers Livre*, p. 96 (dialogue de Panurge)]

1) G. Gougenheim, « Le genre de < foudre > chez Corneille », in *Le français moderne* no. 19, 1951, pp. 91-94; dans *Études de grammaire et de vocabulaire français*, Picard, 1970, pp. 391-394.

2) K. R. Nyrop, *op. cit.*, p. 379; M. Grevisse, *op. cit.*, p. 765; A. Dauzat, *op.*

cit., p. 136.

3) ユグによれば、ラブレーの同時代では *amour* は女性名詞扱いが多い。cf. Edmond Huguet, *Dictionnaire de la langue française du XVI^e siècle*, 7 vols, Champion-Didier, 1925-67, t. 1, p. 199.

4) J. Palsgrave, *op. cit.*, p. 166.

表 2

	<i>Panta.</i>	<i>Gargan.</i>	<i>Tiers</i>	<i>Quart</i>	<i>Cinq.</i>	œuvres div.
nom animé						
1. aigle	1531ou32?	1535?	1546	1552	1564	
2. trompette		28f		17f	42m→f (M)	L3m
3. unicorne				2m, 4f	29f	PPf, SCm
nom inanimé						
1. aage	8fl	3f	8md, 31md	27md	Prf(64)→, 16f→?(64, M), 27m d, 29md	L1f
2. amour	9fd→m?(42)		12md, 18md	3fl, 51md		
3. arbre	11md	5m(42)→, 21f, 25f, 34m(42)→, 34m, 42m, 53mf	1f, 2md, 49f, 51f 52f(52)→	4ml, 27fd, 32fd, 32fd, 32fd, 35m, 62f		
4. ars	7m, 8ml	26md, 53m	25fd, 51m	57m, 57f, 57f	30m	
5. cabal	Prf(42)→		15f, 15f, 15m		11f	PNf, PPm, MBm
6. caresme	9bfd				28md, 28md, 28?d→m (M)	PPf→m(42)
7. comete		21f		26md, 27md		
8. enclume	19m(42)→	41f		61f		
9. estude	23f(42)→	21f	25md, 31fd	3fl, 51fd	1fd, 21md, 24m→f (M)	EPfv
10. humeur	23f		24m, 32fd, 40md			

11. mode	f = 5 + 2	f = 4		f = 5	32f → m (M)	L 1f
12. navire	f = 9	f = 1	f = 1	f = 4	15f, 15m, 17f	L 2f
13. negoce	19md		41m, 48md	APm, 67f (注)		
14. oeuvre	5f → m (42)	50f	1f	53md	5fd	
15. oraige				20md, 23fd, 23fd (48) → f		
16. oultrage		15mf, 23m, 29fd			21m, 32m, 42m	
17. ouvrage	12fd				2m	
18. palude	23f (42) →				m = 1 + 8 + 1 (M)	EPf, SCm, L1m, L3m, L3m.
19. reste	m = 4 - 1 f = 1 + 2	m = 17 f = 2	m = 9	m = 13		
20. silence	13f		19fd, 19fd, 37fd	63m		
21. sors		m = 2	m = 17 f = 7			
22. teneur		27m		3f, 4ml		
23. tige			49mf, 49m, 49m, 49m, 49 → ? (52), 50m			

(注) ラブレールの作品に於ける唯一のこの女性扱いは、エシヨンによれば (M. Huchon, *op. cit.*, pp. 384-387), パリ国立図書館蔵の 1552 年 ミッセル・フザンダ版 (Réf. Y^o 2164) で直接手を加えられ、男性名詞扱いに訂正されているとのこと。尚、この版にはこれ以外にも修正が入り、これらの修正の多くは、この版に基づいて作られたと思われる 1552 年出版元不明の版に精査され、エシヨンはこの筆を入れたのがラブレールであると推定している。ただし、当の男性名詞に訂正されたはずの «negoces» は 1552 年出版元不明版では女性名詞のままであった。従って、ここではヴァリアントに加えていない。

[Panurge dit] et jamais le bon amour ne estre sans craincte. [*Le Tiers Livre*, p. 135 (dialogue de Panurge)]

vous sentez en vos cœurs enflammée la fournaise d'amour divin; [*Le Quart Livre*, p. 211 (dialogue de Homenaz)]

この傾向が1542年版『パンタグリユエル物語』9章での女性名詞扱いを止めさせたのではないか(上記引用文参照)。また、『第四之書』3章の手紙文で女性名詞扱いされているのは、この時期男性名詞が主流であったため、女性名詞を用いることで擬古的にしようとしたのではないか。

comme tu sçays que à la bonne et syncere amour est craincte perpetuellement annexée. [*Le Quart Livre*, p. 45 (lettres de Gargantua)]

これと同じように手紙文で擬古的にするために性を変えたと考えることの出来る名詞に無生名詞 C-22 *teneur* がある。尚、表2に見られる通り、この *amour* が全て会話文で男性名詞扱いで現れていることも、*aage*, *comete* の場合とともに興味深い。

Cabal, cabale (無生名詞 C-5, 意味要因)

『第三之書』15章の男性名詞 *cabal* は、既に指摘されているように¹⁾、ガスコーニュ方言で「投資するために借りる資本」の意味で用いられ、「カバラ」の意味の女性名詞 *cabale* と言葉遊びをしている。

A ceste heure (dist Panurge) te ay je entendu, couillon velouté, couillon claustral et cabalique. Il me y va du propre cabal. Le sort, l'usure et les interestz je pardonne. Je me contente des despens, puyz que tant disertement nous as faict repetition sus le chapitre singulier de la caballe culinaire et monasticque. [*Le Tiers Livre*, p. 120 (dialogue de Panurge)]

この名詞は出所が異なり、意味そのものも違うことから性の区別がなされていると思われる。無生名詞 C-11 *mode* は、『第五之書』筆写本32章で唯一男性名詞となっているが、この箇所のみ *mode* は「様相」の意味で使われている。

navire (無生名詞 C-12, 語源・語尾要因)

表2に見られる通り、『第五之書』15章で男性以外では、一貫して女性名詞扱いを受けてきた²⁾。語源が男性であるにも関わらず女性名詞扱いであったのは、H. エチエンヌが『新たなフランス語に関する二つの対話』(1578年)中で登場人物セルトフ

1) *Le Tiers Livre*, op. cit., p. 120, note 88.

2) ユグ, マルチャー・ラポーによれば、当時 *navire* はやはり女性名詞扱いが多かった。

cf. E. Huguet, *Dictionnaire de la langue française du XVI^e siècle*, op. cit.; Ch. Marty-Laveaux, op. cit., t. 2, p. 16.

イルに語らせている言葉からも推測することが出来る。対話者フィロゾヌの「男性名詞扱いにするのは、最近の流行だ」《Je l'ay dict selon la mode qui trotte.¹⁾》という言葉に対して、セルトフィルは語源は《navis》で女性、語尾は《-e》であることから男性名詞扱いに反対する。

Encore ce changement seroit plus tolerable en ces mots [=comté, duché] qu'en cestuy-là « navire ». Car outre ce que le latin *navis*, d'où il vient, est de genre feminin (comme aussi le grec *naus*), on voit bien que la terminaison du mot « navire » convient au genre feminin plustost qu'au masculin²⁾.

『第五之書』での男性は、このような「最近の流行」だろうか。それにしても『第五之書』の他の2例は女性名詞扱いのまま、ヴァリエントがなく、一貫していない。尚、ユグは、navire が男性名詞にされたのは《vaisseau》からの類推ではないかとしている³⁾。

œuvre (無生名詞 C-14, 語源・文体要因)

現在でも「(芸術家の)全作品」、建築用語、「練金術」の《grand œuvre》で男性名詞扱いであるこの名詞は、元来、ラテン語源 opera (女性名詞)から女性名詞扱いを受けてきたが、16世紀にはラテン語 opus (中性名詞)の影響で男性名詞扱いになったものも現れた⁴⁾。そして、グレビスは、œuvre は高尚な文体で男性名詞扱いされるとして、ラ・フォンテーヌ、ボワロー、ヴォルテールの例を挙げている⁵⁾。『第四之書』53章でラプレーは次のように男性名詞扱いをしている。

Et donne ordre que ces precieux œuvres de supererogation, ces beaulx pardons au besoing ne nous faillent. [*Le Quart Livre*, p. 221 (dialogue de Homenaz)]

この《ces precieux œuvres de supererogation》の《(œuvre de) supererogation》はカトリック神学用語で⁶⁾、opus の語源に影響されて男性名詞扱いとなったのではないか。

palude, palus (無生名詞 C-18, 語源・外来語要因)

16世紀の辞書から既に男性名詞扱いであるが、『パンタグリユエル物語』23章で女性名詞、『第五之書』2章では男性名詞である。この名詞はラテン語源では女性であるので『パンタグリユエル物語』の用例は、この語源に戻ったと考えられるが、もう

1) Henri Estienne, *Deux dialogues du nouveau langage françois* [...], Genève, Slatkine, 1980, p. 270.

2) *ibid.*, p. 271.

3) E. Huguet, *Etude sur la syntaxe de*

Rabelais [...], *op. cit.*, p. 26.

4) K.R. Nyrop, *op. cit.*, p. 363; M. Grevisse, *op. cit.*, p. 763.

5) *ibid.*, p. 763.

6) *Le Quart Livre*, *op. cit.*, p. 408.

一つの解釈も可能である。『パンタグリユエル物語』23章では *palude* は次のように現れる。

ny la palus Camarine, ny la punays lac de Sorbone [*Pantagruel*, p. 176, 1542 版以降]

«*la palus Camarine*» はシチリア島に実在する沼地であることから、この女性名詞扱いはイタリア語からの影響とも考えられる(イタリア語では *palude* は女性名詞)。

尚、『第五之書』のみが他の作品と名詞の性の扱いが完全に異なっているものには、この *palude* の他に上記の *mode* を除けば、*ouvrage* がある。しかし、表2に見られる様に、逆に性の一致が起こっている名詞が多い事、また、性のゆれ自体が大きい事等があって、これだけではラプレーと『第五之書』の関係が何か言えるわけではないが、この事実だけ確認しておこう。

5 結 び

以上、ラプレーが性を現代の用法とは異なって使用した名詞について分析してきた。この分析結果から見れば、その大きな特徴は、無生名詞において、男性名詞扱いのものは語源からの影響、女性名詞扱いのものは語尾形態からの影響が強いことが確認された。また、その際に意味の類推によるものもあった。更に、この傾向は両性で用いられた名詞にも見られ、そこに文体効果が働いた可能性も指摘することができた。*antistrophe*, *arbre*, *ars* 等のように語源、意味、語尾その他の要因から一貫した説得的な説明をすることが出来ないものもあったが、各々の名詞の用例を具体的に、そして詳細に検討することによって、流動的な16世紀フランス語の世界におけるラプレーの名詞の性に対する態度をある程度まで明らかにすることが出来たと思われる。

(日本学術振興会特別研究員)

(本稿は平成6年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部を成すものである。)